

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.206
2020.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第36回 ● コロボックル考古学と松本彦七郎

「アイヌ・コロボックル論争」は坪井正五郎の客死により自然消滅し、モース以来の石器時代「非アイヌ説」は表舞台から一時姿を消す。替わって小金井良精・鳥居龍蔵を双壁とする石器時代「アイヌ説」が当世を風靡するが、坪井正五郎の人類学を評価する解剖学の長谷部言人が東北大学へ赴任後早くも大正6年暮れには「石器時代住民必ずしもアイヌとは言へぬ如うである」と石器時代「アイヌ説」の見直しを開始する。併せて柴田常恵の富山県大境洞窟調査に参加し八木英三郎の南加瀬貝塚以来の「弥生式」を中心とする層位発掘を行い、層位による年代的な細別を成功させ、山内清男に仙台行を決意させる。ここに長谷部言人ー山内清男の出会いが生まれ、最強・不滅の編年学コンビ誕生となる。

編年学コンビ以前には東大・京大・東北大による3大学「アイヌ式」研究が興り、層位による年代細別機運全盛の相互影響が顕著な論文を輩出するが、詳細は省略に従い(書誌情報と動向は早坂広人(2018)「編年学の青春」参照)、ここで特に触れるべきは「コロボックル考古学」その後における加曾利B式的方法的位置付けである。

「コロボックル考古学」は遺蹟間で分析される「両所土器不一致」現象に対し、①年代の連続する新古の違い、②年代の断続する新古の違い、③同時代異部落の違い、という3者の可能性を導出し、諏訪湖底ソネと湖辺との関係を遺蹟形成論から「両所生活様式不一致」と解釈し、「同時代異部落」を選択する。山内清男の指摘する「鳥居博士諸説の原型ではあるまいか。」に相応しい論述である。こうして鳥居龍蔵は坪井正五郎の後任としてこれまで通りに「コロボックル考古学」を継承すると共に、「同時代異部落説」により加曾利B式等のアイヌ人薄手派を海岸部族と呼び、

厚手派の山岳部族と共に同時代に対置させて異部族展開を図る。

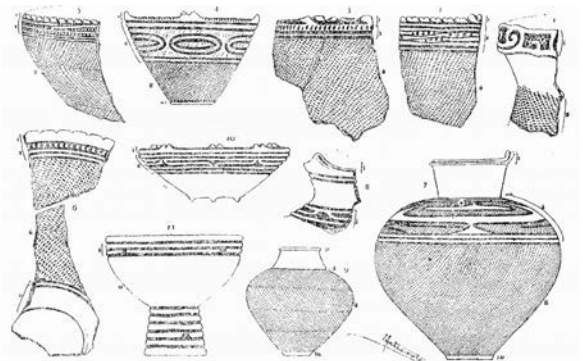
「コロボックル考古学」のもう一人の継承者は山内清男同様に長谷部言人の強烈な影響を受け、大正8年に大活躍する松本彦七郎である。詳細は機会を改めるが、ここでは、①加曾利B式の位置付け、②「土器紋様論」による羽状縄紋ストーリーへの執着、③斜面貝塚層位の誤認識、の3点のみ要点に触れる。尚、大洞編年後も山内清男は寛容の姿勢を装う。

先ず、「日本先史人類学」に「コロボックル考古学」の継承と加曾利B式の位置付けを確認する。松本彦七郎が強調する「遺跡の型式」の定義と実際の形態分類は、坪井正五郎の西ヶ原貝塚報告が導出する「土器様式名称」の手続きを本質とし継承するが、加えて大境洞窟の層位別に年代細別の時流を読み取り層位別も「様式」として認定する。その「遺跡の型式」によると「アイヌ式」は、「第一期、大木式。(中略)沼田氏の土器把手の型式としての大森式はこの式のものである。様式は(中略)大木介塚。」(ゴチック体は引用者。以下同様)、「第二期、瀬澤式。(中略)沼田氏の土器把手の型式としての亀ヶ岡式はこの式のものである。様式は(中略)瀬澤介塚。」、「第三期、宮戸式。(中略)羽状全縄紋土器は長谷部博士が土器の型式として宮戸式と名づけたものである。様式は(中略)宮戸島里濱介塚。」の3期として年代細別される。「大木式」に分類される「大森式」把手は加曾利B式であり、関東の「厚手式」と「薄手式」は年代同期となり、鳥居龍蔵同様年代細別に進展は見られない。尚、「瀬澤式」とされる「亀ヶ岡式」把手は「大洞C2式」以後の

突起であり、「アイヌ式」終末とされる「宮戸式」との関係に関心が赴く。

続く「土器紋様論」でも「第一期」に「亜式」(一時的に文中では「第二期」として独立させるが、最終的に「第一期」に合体。後日の「宝ヶ峰下層期(式)」を認めるものの第三期までの年代細別は変わらず、第41図が付され、出土地と「模様」が説明される。今日的眼で見れば、「瀬澤式」は「大洞C2式」~「大洞A式」、「宮戸式」は「大洞BC2式」~「大洞C1式」等であり、年代細別に成功するものの、山内清男編年と逆転する年代の新古となる。

松本彦七郎の「宮戸式」は層位的に「瀬澤式」よりも上位層出土で、しかも概念語りの「土器紋様論」では羽状縄紋ストーリーに執着し、羽状縄紋の「弥生式」や「第四期、大境五層式」と連絡する層位として新古関係を検証する。しかし、そもそも新古が逆転しており、「土器紋様論」はお伽漸に過ぎない。この新古逆転の原因は松本彦七郎による層位の著名な誤認識に尽きる。「宮戸島里濱介塚の分層的発掘成績」によれば斜面貝塚の切土崖面を利用する発掘の上下層位に従うことから、上位層が古く、下位層が新しくなる斜面貝塚特有の層位関係が全く斟酌されておらず、層位による新古の捏造である。



▲第41図:「土器紋様論」の図(Matsumotoサインに注意)

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 コロボックル考古学と松本彦七郎(第36回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第29回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第199回) 横手伸太郎 …3
■考古学者の書棚 『海に生きた弥生人 三浦半島の海蝕洞穴遺跡』忍澤成視 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第29回) 間壁 忠彦・間壁 霞子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・罔勝・罔依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(6)

前回の最後に、骨蔵器の形態から吉備祖母のものは地元吉備に於ける製品だったのでは、と記した。と言うのも、真備祖母骨蔵器と同様の銅製骨蔵器で、それに刻まれた墓誌は、わが国で唯一中国の墓誌銘形式と同一「銘并序」のタイトルを持った、少納言正五位下威奈大村の鑄銅製骨蔵器との対比だった。それは祖母骨蔵器の1年前、慶雲四(707)年銘を持つが、見事な球形で小さい高台付き、中央で上下に別れ、厚さは1~2mm程度。径も高さも24cm強、鍍金された仏具を思わず瀟洒なもの、重さは2.5kgにも満たぬものだった。

これに対し真備祖母の骨蔵器は、和銅元(708)年、U字形胴部に、笠形蓋のつく形、蓋径23.7cm、総高23.1cmと外見的には、前者よりやや小振りに見えるが、重さは約7.6kgと3倍もあり、報告者も梵鐘を思わず感触と記す。だが現物を見れば、鍍金された仏具を思わず、威奈大村の骨蔵器に劣るというのではなく、重厚な特殊な美を示す形態という思いが強い。これこそが吉備での特性と思われる点である。

わが国で知られる則天文字として最も古い例は、正倉院蔵本で、大村骨蔵器年銘と同じ707年に書写とされた『王勃(おうぼつ)詩序』中に見られる文字である。片田舎で、この翌年の年号を持った真備祖母の骨蔵器に用いられていた「罔」字は学者を驚かしたのも無理はない。それに加え、わが国での火葬開始は、僧道昭による700年という常識から、真備祖母の火葬が708年という火葬採用の早さも注目されて来たが、骨蔵器の製作場所についても、注目されねばならなかった筈だ。火葬の骨蔵器は、中央での最新の仏具的なものでなく、しかも独自の形態の重厚で立派なものだったのである。

それに加え、真備祖母が埋葬された時期は、わが国では「夫人」呼称が、天皇位に関わる女性身分として、既に厳しく規定されたと見て良い時期。当時の奈良の都、藤原宮で仕官していたと思われる真備の父、下道朝臣罔勝にとっては、憚られた表現の筈。他の墓誌の事例が示しているように。

真備祖母が何処で死亡したかは分からないが、吉備の地で8世紀の最初頭期なら、まだ古墳も利用されており、都から息子が帰る間の殯など、普通にされたであろう。恐らく「母夫人」は当時都在住だった可能性が強い。そのため火葬にして、骨は罔勝によって故郷に帰ったのではと思う。古墳時代の最終末には、骨になって帰葬されたと思われる人物の棺が、小形の棺が出現している。

祖母の死により、始めて真備も父と共に、故郷を訪れたのではなかろうか。持統朝の695年誕生と推定される真備は、すでに13~14歳、現在の中学1年生程度だが、都では、既に秀才とか天才の噂の高い少年だったのでは。歴史上でも現代でも、この年齢の少年に、きわめて優れた才能を示す者がいることは、良く知られている。彼は当時の最新文化の地、唐への留学を目指し、その吸収に都で専念していた時期であろう。則天文字は、現役の役人にとっては全く不用、すでに唐では使用禁止の文字と知っても、現実には唐代の必要文献には書かれている。その則天文字も学び、中国の墓には死者に贈る墓誌のあることも、

既に知識があったのでは。

父と共に始めて故郷に帰って、真備にとってはむしろ故郷の持った文化に驚いたかもしれない。飛鳥地方の寺々に近いような寺が既に作られ、新たな建築も進んでいる。その屋根は見事な瓦で葺かれ、軒先の瓦文様は、大和のものより華麗にも見える。数代前の祖先の墓だといって、これも大和で目にしていた山のような墓の存在にも驚いたであろう。

もっと驚いたのは、祖母の鑄銅製骨壺がすぐ作られたことだったかもしれない。ここでは近くに鉄や銅製品の加工をする村々があり、少し離れた山中には鉄を生産する場所が随所にあった。飛鳥の地で、新文化を築いた宮廷や貴族社会の子弟の中で、自然に自分の立場を知ってきた秀才の少年は、実は自分の故郷も誇るべきもの、との自信を強めたのかもしれない。それを築いてきた祖母たちや故郷の力に尊敬の念を強めたのかもしれない。

父・罔勝、叔父・罔依は骨蔵器の出来に満足だったかもしれないが、真備にとっては、近年努力して学んだ則天文字、他の学生が注目もしない、唐国の葬法、故人を顕彰する墓誌、これのないことは不満だったのでは。つい前年の少納言威奈大村の墓誌銘が飛鳥の学識者間では話題で、少年真備だけが、それも知りえていても不思議はない。彼が祖母骨蔵器に墓誌を刻む事を提案したとも思われる。

しかし吉備の地での、父や叔父も含め、一応の知識人でも、あの祖母の骨蔵器銘は誰にも書けないだろう。「母夫人」の文字は都周辺の知識人では平気で使用できない状況だろう。則天文字など知っていたかどうか…わざわざ使用しないはずだ。吉備の地の外来文化は、朝鮮半島経由が主、その地も墓誌は無いに等しい。あの骨蔵器銘は、知識欲の旺盛な、唐の文化の全てに夢を持って勉強する、少年の日の真備にしか書けなかったものだ…と私は思っている。

父や叔父の「くに」字に、誰も知らぬ「罔」字を使い、墓誌には最初に「銘」字を書くもの、しかも「夫人」の呼称は中国では、一定地位の家族の中で中心となる既婚女性の呼称、…この原文が書けるのは少年真備以外にはいない…刻字できる工人は、吉備には居て不思議はない。そこは既に、「まがねふく」として知られる地であったから…

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長

1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回はい川史子先生です。

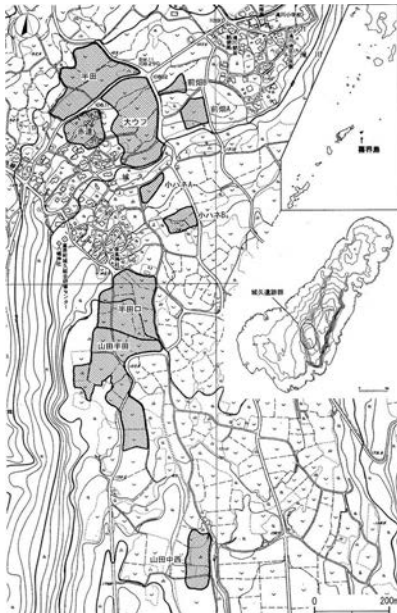
U レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 199

城久遺跡 ～鹿児島県喜界島

横手 伸太郎

私が、おすすめする遺跡は鹿児島県喜界島に所在する。城久遺跡です。喜界島は鹿児島本土から南へ380km、沖縄島から北へ400kmというそれぞれの地点から約半分の距離にあり、奄美大島の東25mに位置します。平坦な隆起サンゴ礁の島で、周囲48.6km、標高211mほどの島です。



▲図1：城久遺跡 位置図(澄田・野崎2008より引用)

城久遺跡は、喜界町の城久集落に所在する山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畑・大ウフ・半田・赤連遺跡、計八遺跡の総称です。(図1)元々は城久遺跡群とよんでいましたが、2017年に国指定史跡名称として、城久遺跡が使用されました。現在、49,257㎡の範囲が国指定史跡となっています。これまでの調査により、大まかに3期の時期に区分することが可能になりました。

I期(9世紀～11世紀前半)には、土師器甕・坏・布目庄土器・越州窯系青磁碗・白磁碗といった日本本土や大陸系の遺物が出土しています。同時期に、奄美群島で使用されていた在地の土器である兼久式土器は数点しか出土しておらず、出土した土器のほとんどが日本本土の影響を受けた土師器の甕類です。建物も2間×3間の柱筋が通った建物跡が作られています。また、須恵器壺を蔵骨器として使用した火葬墓も出土しており、日本本土の影響も考えられます。

これらのことから、I期に遺跡を営んだのは在地の人々ではなく、日本本土から移住をしてきた人々ではないかということが指摘されています。特に長徳4(998)年には大宰府から下知をうけた「貴賀島」として、喜界島の名前がみられ、古代日本国家と、喜界島との間に当時密接な関係があった可能性が考えられます。

II期(11世紀後半～12世紀前半)には、白磁碗、皿・青磁碗・中国産陶器類・初期高麗青磁碗・高麗陶器・徳之島産カムイヤキ壺・甕・長崎産滑石製石鍋といった実にバリエーション豊富かつ、大量の遺物が出土しています。遺跡の範囲も大幅に拡大し、特に山田半田遺跡では遺跡内で最大の四面庇建物が作られており(図2)、



▲図2：山田中西遺跡発見の建物群

これに付随する住居・倉庫といったセット関係も見られ、遺跡は最盛期も迎えます。

お墓も多様な種類のもので発見されており土壙墓の他、一度火葬にした骨を再度埋葬し、カムイ

ヤキ壺や白磁碗、ガラス玉を埋納したお墓(焼骨再葬墓)も見つかっています(図3)。

大ウフ遺跡では製鉄炉・鍛冶炉が発見されています。原料から鉄を取り出し、インゴット化する作業が行われていたよう



▲図3：小ハネ遺跡検出の焼骨再葬墓(白いガラス玉の下に焼骨がある)

です。琉球列島ではこの時期に、鉄器の本格的な使用が始始していますが、同時期の製鉄遺跡は琉球列島の中では、喜界島以外では確認されておらず、中世期の琉球列島における鉄製品の流通を考える上で、重要な事例だといえます。

続く12世紀後半期になると、白磁碗や青磁碗などがごくわずかに出土するばかりで、遺跡の規模が急激に縮小します。文治4(1188)年には、源頼朝が「貴賀島」を討伐するように命令を下した記事が確認されており、遺跡の縮小化との関係が考えられます。

III期(13世紀～15世紀)になると、標高の低い地帯にて再び遺跡が営まれ、建物を囲むように溝状遺構が巡らされています。この時期には沖縄島や奄美大島でみられる吹出原型建物が作られており、沖縄島の集落との関係性が指摘されています。

一方、城久遺跡から5kmほど南に位置する手久津久地区遺跡群では、同時期の集落が発見されており、城久遺跡と同様に建物の周囲を溝で区画する遺跡も見られています。このことから、標高の高い箇所に分布していた集落が、海岸沿岸部に移動したことも考えられており、喜界島には依然として、大規模な集落が営まれていたことが考えられます。

城久遺跡が展開した9世紀～15世紀は、琉球列島にとって大きな画期となるものでした。それは縄文時代から続く狩猟・漁労・採集を主な生活基盤としていた時代が終わり、次のグスク時代とよばれる、農耕を主体とし、グスクとよばれる防御施設が作られる時代へと転換した時期です。城久遺跡でもイネやオオムギといった栽培作物の種子が発見されています。

城久遺跡の出現によって、琉球列島は劇的な変革が起き、それがやがて後の琉球王国の形成にも影響をあたえたものとして、城久遺跡の存在抜きに琉球列島の古代～中世を考えることは不可能になっています。

現在、城久遺跡は約57,000㎡の範囲にわたり、盛土による保存がなされており、現地には山田中西遺跡で発見された四面庇建物の柱穴が復元されています。遺跡が位置する台地からは天気の良い日に対岸の奄美大島が目視できます。また、出土した遺物の一部は近くの喜界町埋蔵文化財センターにて見学することが可能です。

城久遺跡の発見のみならず、喜界島をはじめとした奄美群島では近年、重要な発見が時代を問わず相次いでおります。これからも奄美群島の調査成果に目が離せません。

参考文献：

- 池田榮史編 2008『古代・中世の境界領域』高志書院
- 喜界町教育委員会 2015『城久遺跡群一総括報告書一』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 澄田直敏・野崎拓司 2008『喜界島 城久遺跡群』『古代・中世の境界領域』高志書院

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは南 勇輔さんです。

考古学者の書棚

「海に生きた弥生人 三浦半島の海蝕洞穴遺跡」シリーズ遺跡を学ぶ118

中村勉 著／新泉社(2017)

忍澤 成視

1 日本における洞穴遺跡研究

日本における洞穴遺跡調査は、1879(明治12)年、イギリス人の鉱山技師ジョン・ミルンによる北海道小樽市の手宮洞穴の調査にはじまり、当該洞穴壁面に描かれていた幾何学的彫刻が古代文字か古代絵画かの論争を呼び、明治から大正期の考古学会をにぎわした。その後、1918(大正7)年、富山県氷見市大境洞窟発見により、本格的な洞穴遺跡研究がはじまる。東京大学人類学教室の柴田常恵が、洞窟内堆積物の層位学的調査を実施し、近代から縄文時代に至る文化層を発見、これらが土層新旧を示す重要な手がかりとなることを科学的に証明した。その後洞穴遺跡研究は、日清・日露戦争など当時の社会情勢を反映し、高まる「民族意識」のなか、日本人の起源解明のための人類学的試料発見に重点が置かれていく。

2 三浦半島の海蝕洞穴遺跡

洞穴遺跡には、山間部の洞窟や岩陰などと海岸部に見られる海蝕洞穴内につくられたものがある。三浦半島の海蝕洞穴は、三浦層群と呼ばれる2,000万年前から1,500万年前に海底に堆積した軟質な粘土層(三崎層)と火山噴出物を含む硬質な凝灰岩層(初声層)が合わさった岩層から成る地層が、地殻変動によって隆起して地上に現れ、その後7,000～6,000年前の地球温暖化による縄文海進の際、波蝕によって断崖地層の軟質部分が浸食されて洞穴状に抉られたことでつくられたものである。

1924(大正13)年、神奈川県横須賀市で小学校教員の傍ら考古学研究をおこなっていた赤星直忠は、三浦半島東岸中央部にある鳥ヶ崎洞穴を発見、発掘調査を実施し弥生時代から古墳時代の遺物や埋葬人骨を検出している。この調査を機に、三浦半島全域におよぶ海蝕洞穴の分布調査が行われて40か所余りを発見、このうち20か所以上が発掘調査され、縄文時代から中世に及ぶ洞穴利用の実態が解明されている。このような場所は全国でも稀有である。

3 弥生時代の洞穴利用 一特徴的な遺構と遺物一

三浦半島における海蝕洞穴遺跡は、東京湾に面した半島東岸と半島の先端部で太平洋に面した南岸に分かれる。そしていずれも縄文時代から利用されるものは少なく、大半は弥生時代以後に遺跡形成がはじまっている。

弥生時代の洞穴利用を示す証として特筆されるのは、ラミナ(葉片状累層)と呼ばれる地層の形成である。葉が重なるように、灰と土や貝の層が薄く交互に堆積し、これらが整然と厚い堆積層を形成しているのである。元来ラミナとは、水流などの影響で自然堆積した地層を示す用語だが、これらの地層は人為的に形成されたものと考えられ、洞窟内の湿気を防ぐための行為の跡、もしくは海水利用の製塩作業の跡など諸説があり、まだ成因は明らかになっていない。一方、層中からは付近の岩礁海岸で採取したサザエ・アワビなど巻貝主体の貝類、マダイ・カツオ、マイワシ・マアジ・サバ、ウミガメ・イルカなど外洋に生息する魚類や海獣類、アホウドリ・オオミズナギドリ・

ウミウ・ヒメウ・カモメ・ウミスズメなど渡り鳥や海鳥、そしてイノシシ・シカなど哺乳類の骨が多数出土し、当時の食生活が復元できる。人工遺物として特徴的なのは、骨角製のヤス・銚・釣針・アワビ起こしなどであり、その形態から東北・東海・紀州などとの関わりも想定されている。また、付近海域に多いタマキガイ科二枚貝の貝輪製作残骸、伊豆諸島産のオオツタノハ製貝輪、タカラガイやイモガイ類の加工品、アワビ貝殻の加工残骸、イノシシ・シカの部位骨を利用したト骨など、装飾品や呪術用具が多くみられることは、海岸部洞穴利用の意味を考えるうえで重要である。

4 三浦半島の弥生集落

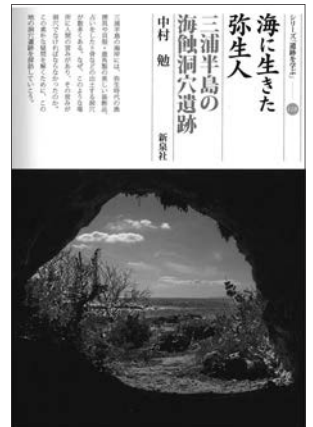
半島内陸部の集落遺跡で注目されるのは、逗子市池子遺跡と三浦市赤坂遺跡である。前者では、集落跡とともに当時の河道内から木器・骨角器・植物・骨類など多量の遺物が見つかった。後者は弥生時代中期中葉から古墳時代前期前半まで続く集落であり、多数の竪穴建物跡や方形周溝墓が見ついている。特に、最大長15m、巨木柱を伴うとみられる巨大な竪穴建物跡を有することから、当時この一帯最大の拠点集落であったと推定されている。これらの遺跡には、骨角器、動物遺存体、貝製品などの在り方に、海岸部海蝕洞穴遺跡と共通点が多く見られることが指摘されている。

5 台地の集落と海辺の洞穴の関係

大正年間に三浦半島の海蝕洞穴遺跡が発見・調査されて以来、ここから見つかる遺構・遺物が、海岸部での漁労に依拠したものであることを推定させ、稲作農耕を生業の主とする一般的な弥生時代集落のイメージと異なることから、その利用者の素性や使われ方が度々議論されてきた。近年、内陸部の弥生集落の調査成果が新たに加わったことから、海岸部海蝕洞穴遺跡と集落遺跡の関係にはより密接なものがあり、弥生＝稲作農耕社会の安易な図式は、今後さらに修正を加える必要があるとみられる。

6 洞穴利用の変化

三浦半島の海蝕洞穴は、古墳時代以降には埋葬に関わるものに変化していく。多数の人骨や副葬品の発見、火葬の痕跡などさまざまなものが見られる。そこには、海岸部洞穴という特異な環境を背景に、台地上での墳墓造営とは異なる死生観が誕生し、その舞台として利用されていった過程がうかがえるのである。



アルカ通信 No.206

発行日 2020年11月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp